東京外国語大学論集 第105号 (2023)
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES, AREA AND CULTURE STUDIES 105(2023)

東京モスクと技師吉本與志雄
Tokyo Mosque and Yoshimoto Yoshio, an Engineer

川本 智史
東京外国語大学世界言語社会教育センター

KAWAMOTO Satoshi
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Centre

はじめに
1. 戦前日本のイスラーム政策とモスク建設
2. 技師吉本與志雄
3. 東京モスクの建築的特徴と吉本の選定
4. 施工業者師田組
5. 戦中の吉本
6. 戦後の吉本
おわりに

キーワード：東京モスク、吉本與志雄、様式建築、モダニズム建築、三菱地所
Keywords: Tokyo Mosque, Yoshio Yoshimoto, Eclectic Western architecture, Modernism architecture, Mitsubishi Estate

本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

要旨

現在、東京代々木にある東京ジャーミーの前身として知られる東京モスクは、1938 年に日本の国策のもと完成した建物としてよく知られている。対イスラーム政策の一環として在日タタール人らの要望に応えて建設されたモスクは、近代日本史の観点からは言及されてきたが、その建築的特徴と設計者についてはほとんど分析されることがなかった。本稿では設計者である吉本與志雄の経歴を紹介するとともに、なぜ彼が選ばれ、どのような建物が建てられたのかを考察する。吉本は東京工業専門学校で中堅技師としての建築教育を受けた人物で、折衷的な様式建築を得意とした。早くに三菱地所部を退所してからは個人事務所を経営したが、モダニズム建築が興隆する時代であり、確認できる仕事の数は少ない。三菱ネットワークから紹介された東京モスクは、様式建築設計の技術を持つ彼が腕を振るえる最後の舞台であり、書籍などで紹介されるエジプトの有名建築からの切り貼りによって構成されたのであった。

Abstract

Tokyo Mosque was the second mosque in Japan built after Kobe Mosque. Being supported by the Japanese government and right-wing organizations who were seeking collaboration from Muslims in Asia, a Muslim-Tatar group in exile implemented the house of prayer at the heart of the imperial capital in 1938. The fall of the Japanese Empire in 1945 resulted in decline of the Muslim community in Japan as well as devastation of the mosque which was eventually demolished in 1986.

This paper examines the architectural aspect of the building along with its designer, Yoshio Yoshimoto. Yoshimoto, who was trained as a foreman at a technical school, is a less unknown architectural engineer in Japan. After learning various styles of Western architecture, he started his career and supervised several major constructions at Mitsubishi Estate, a leading architectural firm in Japan. However, when he established his own office in 1924, the eclectic architectural style Yoshimoto mastered was slowly giving way to modernism architectural style with less ornament. Tokyo Mosque was one of a few large-scale buildings he could design through the good offices of his Mitsubishi network which espoused Japan's expantionism. Tokyo Mosque turned out to be an ideal work for Yoshimoto's electic design style. The Muslims in Tokyo had already prepared a blueprint of mosque on which he could apply cut-and-paste designs from well-known Mamluk architecture found in publications. Tokyo Mosque marked the end of eclectic Western architecture in Japan on the eve of acceptance of modernism architecture.

はじめに

東京代々木に現存する東京ジャーミーは、1998年に着工し2000年に開堂したイスラームの礼拝堂である。その前身となったのが1938年に落成した東京モスクであること、またこれが、大日本帝国のアジア政策の一環としてタタール系ムスリムが政財界の全面的な支援を得て建設したことについては、すでに坂本勉や田澤拓也の研究によって明らかにされている[1)]。

その一方で、東京モスクの建物としての側面、またその設計者に関しては十分な検討がおこなわれてきたとは言いがたい[2)]。敗戦による政治体制と政策の大転換と、それに付随する日本国内のムスリムコミュニティーの縮小にともない、当初から政治的な意図の下で建設されたこの建物が十分な管理がおこなわれぬまま荒廃し、ついに1986年には取り壊されてしまったことがその一因であろう。同時期に建設された神戸モスクが戦災や震災を経て、今もなお礼拝の場としての機能を保っているのとは対照的である。

本論文は現存しない東京モスクの建築的特徴を分析するとともに、その設計者であった吉本與志雄（1895-1973）に焦点をあてる（図1）。モスクを設計したのが吉本であったことや、彼がその他若干の設計活動に従事した人物だったことはすでに知られているが[3)]、彼がどのような背景をもつ人物だったかについては不明であった。有名建築家ではなく、無名といってもよい人物が国策建築の設計者に選定された理由を探ることで、東京モスクだけでなく、当時の建築デザインの変遷や、技師たちのキャリアについても明らかにする。

図1　吉本與志雄
（出典：藏前工業會館編、1943）

実は技師吉本與志雄の業績は、大学教育を受けたエリート建築家たちが華々しく活躍した戦前日本の建築界ではほとんど日の目を見ないものであった。しかも装飾的な歴史様式建築のデザインを修めた吉本は、1920年代以降に日本で合理性と機能性を重んじるモダニズム建築が受容されるようになると、力を発揮する場を失っていった。そのような環境にあって、東京モスクとは施主が望んだと考えられる折衷的なデザイン案を、吉本が実現する数少ない機会だったのである。さらに彼は戦後、前歴を活かして実業家へと転身を遂げていたという興味深い事実も判明した。東京モスクとは、戦前日本の国策とタタール人コミュニティー、そして中堅の建築技師という三者が交わる所に生まれた数奇な建築作品にして歴史の一コマだったのである。

---

1) 坂本勉「東京モスク沿革誌」『アジア遊学30 －特集：イスラムとの出会い』勉誠出版、2001、121-128頁；田澤拓也『ムスリム・ニッポン』小学館、1998、73-108頁。

2) 深見奈緒子は日本のモスク建築を紹介するなかで、東京モスクにも触れている。深見奈緒子『世界のイスラーム建築』講談社、2005、272-274頁。また神戸モスクに関する詳細な研究をおこなった宇高雄志も、東京モスクについて言及している。宇高雄志『神戸モスク－建築と街と人』東方出版、2018。近年では五十嵐あすかが東京理科大学に提出した修士論文で東京モスクを題材として、当時の図面や写真を用いて研究した。五十嵐あすか「代々木上原を中心としたムスリムコミュニティと東京回教礼拝堂に関する研究」東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士論文、2020。

3) 宇高雄志、2018、104頁。

1.　戦前日本のイスラーム政策とモスク建設

本論に入る前に、戦前日本における対イスラーム政策と東京でのモスク建設計画についてまとめておきたい。

日本が本格的にイスラームに向き合う契機となったのが、日露戦争とその後の対帝政ロシア政策であった[4)]。ロシアに暮らすアジア系ムスリムの存在とそこへの工作の重要性は、陸軍情報将校や国粋主義者らによって20世紀初頭から認識されていたのである。さらにこれを後押ししたのが、1909年のアブデュルレシト・イブラヒムの来日だった。帝政ロシアの西シベリアに生まれたタタール人ウラマーのイブラヒムは、ロシア帝国内でのムスリムの権利拡大に奔走していたが、挫折すると国外からの支援を得ようと日本を訪れて、先述の日本側関係者と密議を重ねた[5)]。このような過程で浮上したのが東京でのモスク建設計画だった。犬養毅や頭山満、大原武慶のようなアジア主義者らは、イブラヒムのパン・イスラーム主義に共鳴してモスク建設を認め、大原らの奔走で赤坂大谷町にモスク用地が確保され、建設資金はインド人富豪から提供を受ける手はずが整った[6)]。イブラヒムはイスタンブルのシェイヒュル・イスラーム庁からの建設裁可を得るためにオスマン帝国に渡ったが、伊土戦争（1911~12）やバルカン戦争（1912~13）、第一次世界大戦と相次ぐ戦争に協力することになり、結局日本に戻る機会を逸してしまった[7)]。また日本側での窓口になっていた陸軍情報将校の大原も1911年に辛亥革命勃発にともない中国に渡ったため、モスク建設の中心人物がいずれも離日して計画は立ち消えになってしまったという[8)]。

政府レベルでの対イスラーム政策がいったん途絶した一方で、1920年代からは満州や朝鮮半島を経由してロシア革命とそれに続く内戦を避けたタタール人たちが日本へと押し寄せる。19世紀末からタタール人商人らは極東方面へと進出しており、1935年には極東在住のタタール人総数が一万人だったとする説もある。日本に来た彼らは羅紗売りなどの行商人として生計を立て、1930年代には東京だけでなく名古屋、神戸、熊本などにもタタール人コミュニティーが形成されていった[9)]。

これらムスリムのコミュニティーが誕生した大都市には、1930年代になって相次いでモスクが建設される。東京に先んじて日本初のモスクとなったのが神戸モスクだったことは、宇高雄志の研究に詳しい。第一次世界大戦後、貿易のために阪神地域に在住していたインド系ムスリムたちが礼拝の場を求めた結果、民間からの喜捨を募って1935年に神戸の中山手通に鉄筋コンクリート造3階建てのモスクを完成させたのである。建築的な特徴については東京モスク

4)　これ以前にも、1890年にはオスマン帝国の使節団としてエルトゥールル号が来日し、帰路串本沖で遭難した事件が知られる。また、山田寅次郎は犠牲者遺族のための義捐金を集めてイスタンブルに渡ったのち、ここに長期滞在した。だが、イスラームとムスリムへの本格的な対応を国策レベルで検討し始めるのは日露戦争前後とみて間違いないだろう。

5)　坂本、2001、123頁。

6)　小松久男『イブラヒム、日本への旅－ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008、79-82頁。

7)　同書、112-120頁。

8)　坂本、2001、125頁。

9)　松長昭『在日タタール人－歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋出版、2009、5-9頁。

とあわせて後述する[10]。これに続いて1936年には名古屋モスクがタタール人の手によって建設されたが、1945年に戦災のため焼失した[11]。

このように日本社会でも徐々にイスラームとムスリムの存在が感じられるようになったころ、再び日本政府と軍部が対イスラーム政策を意識する契機となったのが1931年の満州事変である。このころより中国やソ連領のムスリム工作の必要性が認識されはじめたが、1936年改定の外務省が策定した『帝国外交方針』にも具体的な対イスラーム政策は明記されていなかった。ところが1937年に盧溝橋事件が勃発し、日本軍がさらに中国大陸へと侵攻していくと占領地域に暮らす回民など多数のムスリムの存在が認知された。彼らを味方につけるための具体的な政策策定のため、同年末には外務省・陸軍・海軍が共同で回教問題研究会を開き、翌年には「回教及猶太問題委員会」を組織して情報の収集・分析・政策策定体制を整備した[12]。

一方当時日本国内のタタール人コミュニティーはクルバンガリー派とイスハキー派に二分されていた。クルバンガリーはロシア・バシュキール地方の有力者家系の出身で、革命後は白軍について敗退後は満州に亡命した人物である。ここで日本のハルビン特務機関の工作や情報収集に協力していたと考えられるクルバンガリーは、1922年に満鉄調査部嘱託に採用され、1924年には日本に活動拠点を移してイマームとして活動するかたわら、軍部や政財界、右翼団体の黒龍会などに接近していた。1928年には東京回教団を組織して、タタール人コミュニティーも指導下においている[13]。一方のイスハキーはカザン出身のタタール人民族活動家で、クルバンガリーを快く思わない多くのタタール人は彼が設立したイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会に参加していた[14]。前者は陸軍、警視庁、右翼団体に支持され、後者はトルコ大使館、関西在住のインド系ムスリム、回教研究所の大久保幸次の支持を得ていた[15]。これは前者がパン・イスラーム主義を唱えて日本の大アジア主義と共振していた一方で、後者が新生トルコ共和国を頼るという政治思想の対立でもあった。

東京回教団の活動は政治分野にとどまらなかった。1927年には新宿区大久保にタタール人子弟教育のための回教学校が開設され、1931年1月には渋谷区富ヶ谷に移転してここには印

10) 神戸モスクを設計したのは、チェコ出身の技師シュヴァーグル（スワガー）とされている。1885年にボヘミア地方に生まれたシュヴァーグルはプラハ工科大学を卒業後、ロシアや中国で建設技師として働いた後、上海で同郷出身のアントニン・レーモンドと知り合う。レーモンドはフランク・ロイド・ライトの事務所で働いていた縁で来日し、戦中アメリカに渡った期間を除けば戦前戦後の日本でモダニズム建築の設計をおこなった人物である。シュヴァーグルは1923年ごろからレーモンドの建築事務所で構造技師として働いたのち、彼と決別して1930年から自身の建築事務所を横浜に構えた。主要作品として横浜のカトリック山手教会(1933)や大阪のカトリック豊中教会(1939)などがあり、大戦勃発のため1941年までには離日して南米へと渡ったのち1969年にアルゼンチンで亡くなった。同書、57-60頁。

11) 店田廣文『日本のモスク－滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社、2015、24頁。

12) 松長昭「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉編著『日中戦争とイスラーム』慶應大学出版会、2008、179-180頁。

13) 同書、pp. 182-185頁。

14) 同書、pp. 187頁。

15) 同書、pp. 188-189頁。

刷所も併設されていた[16]。1930 年 12 月 15 日の読売新聞によると、東京回教団はモスク建設のための募金を募った上で、「代々木富ヶ谷に敷地百八十坪を購入、來春早々工事に着手することになった」とされ、モスクの設計図とされる立面図も紹介されている[17]。しかも不思議なことに、新校舎ではなくモスクが「工事中」とする写真が記事には付されているのである（図 2）。建設途中の木造建築の写真は明らかに翌年 1 月に開校した新校舎のものであり、記者が誤って記事にしたか、あるいは回教団関係者が意図的に誤った情報を提供したと考えられる。富ヶ谷の地に校舎と印刷所の完成後、金曜礼拝には新校舎が用いられていたとする回想があるから[18]、ここにモスクが建てられたという事実は無い。

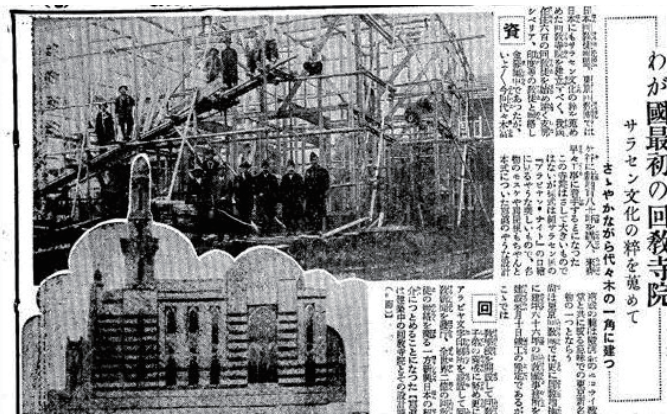

わが國最初の回教寺院
サラセン文化の粹を蒐めて
さゝやかながら代々木の一角に建つ

図 2　回教学校建設を知らせる新聞記事（出典：読売新聞 1930 年 12 月 15 日夕刊第 7 面）

一方で、「設計図」と称する立面図が存在していた事実は興味深い。精力的かつ口八丁手八丁なクルバンガリーの性格を考えると、悲願であるモスク建設の資金を募る際のイメージ図として、彼とその周辺がその青写真を作成していたことは容易に想像できる。新聞記者に新校舎建設の現場を案内する中で、この図面も提供した結果、意図的だったかどうかは別として、具体的なモスク建設計画が立ち上がっているとの誤解が生じたのであろう。偶然記事に掲載されたこの青写真は、1937 年の東京モスク着工の相当前から、関係者の間にモスクのデザイン案が存在していたことを示唆し、後述するように実際の建設にあたってはなんらかの影響を与えていたと考えられる。

1909 年のイブラヒムの初来日以来、紆余曲折をたどった東京でのモスク建設が着工したのは、ようやく 1937 年になってのことである。その主体となったのはやはりクルバンガリーで、まず山下汽船社長の山下亀三郎から、代々木大山町にある 500 坪余の土地を 2 万円で買い取った。これは相場よりかなり安いものだったという。加えてコネクションがあった三菱、三井、住友など財界からの寄付金 12 万円に自己資金を加えて建設費用とした[19]。二階建ての総建坪 432.08㎡

16) Nobuo Misawa(ed.), *Tokyo Muslim School Album(1927-1937)*, Tokyo: Asian Cultures Research Institute, Toyo University, 2011, p. i. なお 1930 年 1 月に学校が富ヶ谷に開校されたとの説明もあるが、これは誤りである。松長、2008、185 頁。

17)「わが國最初の回教寺院」『読売新聞』1930 年 12 月 15 日夕刊第 7 面。また敷地横には建坪 66 坪の回教団事務所ができるとの説明もある。

18) 田澤、1998、92 頁。

19) 同書、95 頁。

のモスクの着工は1937年10月1日で、竣工は1938年5月12日であるから、建設自体はきわめて迅速だったといえる[20]。またモスク建設に先だって、敷地横には回教学校の新校舎も再び建設された。着工直後の10月19日には起工式がおこなわれ、イランおよびアフガニスタン公使、頭山満、川島義之陸軍大将、山本英輔海軍大将、小笠原長生子爵、瀬下清三菱銀行頭取らが参加した[21]。さらに竣工日には内外の関係者を集めて献堂式が大々的に開催され、イエメン王子や中国ムスリムの関係者、満州皇帝溥儀のいとこでムスリムの溥佻、日本からは先の参加者に加えて小橋一太東京市長、松井石根陸軍大将らも参加している[22]。ところが、在日ムスリムの代表としてこの献堂式を取り仕切って礼拝をおこなったのはクルバンガリーではなく、日本軍部から招かれて1933年に再来日していたイブラヒムであった[23]。1938年4月には回教及猶太問題委員会が立ち上げられて、本格的に対イスラーム政策が展開されるようになると、クルバンガリーの対外イスラーム・ネットワークへの影響力のなさと日ごろの横暴な言動に不満が噴出していたのである[24]。そのためクルバンガリーは献堂式直前にはスパイ容疑で逮捕されて、翌月には実質的に追放される形で満州へと去り、東京回教団は解散してイブラヒムが団長となる東京イスラム教団が設立された[25]。

2. 技師吉本與志雄

以上の東京モスク建設と、そこに至るまでの政治的経緯はよく知られる事実であるが、ここからは建築作品としての側面を論じる。あらためて少し時計の針を巻き戻して、モスクの設計者となった吉本與志雄について考えてみたい。吉本は1935年竣工の名古屋にある徳川美術館の実施設計をおこなった人物としてその名は伝えられるものの、一般に知られる建築家ではない。『日本近代建築人名総覧　増補版』を手がかりとして[26]、まずはその前半生を紹介する。

吉本與志雄は1895年に山下与三郎の次男として生まれて吉本亀太郎の養子となった後、1913年に東京高等工業学校（現東京工業大学）建築科に入学し、1916年に卒業した。その後同年8月には、三菱合資会社の地所部に技士補として入社して[27]、施工および実施設計業務を担当したと考えられる。この当時地所部の建築チームを率いていたのは櫻井小太郎で、丸の内ビルヂング（旧丸ビル）の設計などで知られる、イギリスで建築教育を修めた人物である。櫻井の下で三菱関連の建築を一手に引き受ける地所部は、優秀な若手技師が腕を磨くのにはうってつけの一流の設計部局だったといえる[28]。

20) 吉本與志雄 (?)「竣功建造物－東京回教禮拜堂」『建築雑誌』52(642)、1938、1069頁。

21) 東京イスラム教團『禮拜堂開堂一周年・回教公認問題決定記念』東京イスラム教團、1938、1頁。

22) 同書、2頁。

23) 小松、2008、137頁。

24) 松長、2008、210頁。

25) 同書、214-215頁。

26) 堀勇良『日本近代建築人名総覧　増補版』中央公論新社、2022、1484頁。

27)『三菱社誌』第28巻・大正6年下（復刻版）、東京大学出版会、1981、4254頁。

28) 三菱地所部については次の研究を参照。藤森照信「丸の内をつくった建築家たち－むかし・いま」『別冊新建築　日本現代建築家シリーズ15 －三菱地所』新建築社、1992、195-254頁。

ここで吉本が卒業した当時の東京高等工業学校についても触れておきたい。近代日本において西洋式の建築家教育がはじめておこなわれたのが工部大学校造家学科、のちの東京帝国大学の建築学科である。ここではイギリスから気鋭の建築家ジョサイア・コンドルを迎えて歴史的な建築様式の習熟に主眼を置く、「正規」の建築教育がおこなわれていた。建築の大学教育をおこなった機関としては他に、1910 年に建築学科が開設された早稲田大学、1920 年に同学科が開設された京都帝国大学がある。その一方で、大卒の技師たちが実際に建物を建てる際には、施工用の図面を作成し現場を監督する実務家のフォアマン（工手）たちの手を借りなければならない。東京高等工業学校や名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）、工手学校（現工学院大学）がこのような人材の主たる供給元であり [29]、帝大出身者が建築家＝デザイナーとして名を残す傍ら、工業学校出身者たちは建設現場を技術者として下支えしていたのである。

このような場で教育を受けた吉本の卒業設計の図面が、1916 年 12 月の『建築世界』誌に掲載されている（図 3）[30]。『倶楽部案』とされる作品は端正なロマネスク様式を基調とするもので、彼が様式建築を修めた優れたデザイナーであったことがうかがえる。『建築世界』前号にも別の東京高等工業学校卒業生の図面が掲載されていることから、雑誌に掲載されたふたつの卒業設計の一方を制作した吉本が、同学年の首席ないし次席であったと考えられる。優秀な卒業設計を完成させたからこそ、彼は大手事務所だった三菱地所部への就職もかなったのであろう。

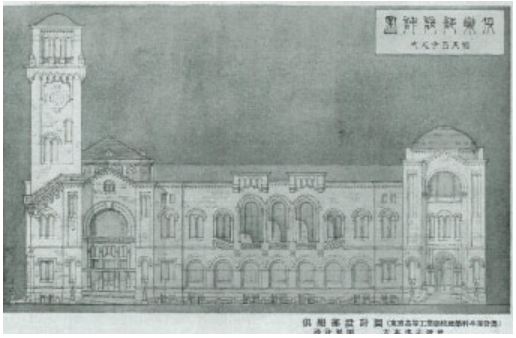


図 3　吉本の卒業設計図面
（出典：『建築世界』10(12)、1916 年 12 月）

ところが 1923 年、吉本のキャリア半ばで勤務先の三菱地所部が縮小されてしまう。その結果リーダーだった櫻井をはじめとして、技士だった吉本も退職を余儀なくされる [31]。これは同年に丸ビル建設工事が一段落したため業務量が減少し、建築技術者が余剰になったためで、1920 年 1 月に地所部全体で 39 人いた技師が、23 年末には半数以下の 17 人にまで削減される大規模な人員整理がおこなわれたのである [32]。退職後、吉本は櫻井が立ち上げた建築事務所で 1 年ほど働いているが、これは三菱時代の残務である東洋文庫建設に従事したためだと考えられる。1924 年 11 月に設立された財団法人東洋文庫の建物は、櫻井小太郎を設計者として同年 10 月に竣工し、吉本は現場主任として施工を管理したことがわかる [33]。そしてこの後、24 年 9 月には吉本建築事務所を主宰して独り立ちを果たす [34]。

しかし残念なことに、丸の内のオフィスビルや東洋文庫のような三菱地所部で担当した華々しい実務経験に比べると、独立した吉本のものとして伝えられる作品はごくわずかである（表 1）。

29) 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』NHK 出版、1977、141-143 頁。

30)『建築世界』10(12)、1916 年 12 月。

31)『三菱社誌』第 32 巻・大正 12 年（復刻版）、東京大学出版会、1981、6484 頁。

32) 三菱地所株式会社社史編纂室、前掲書、332-333 頁；藤森照信、1992、250 頁。

33) 岩井大慧編『東洋文庫十五年史』東洋文庫、1939、27-28 頁；三菱地所株式会社社史編纂室編『丸の内百年のあゆみ － 三菱地所社史』上巻、三菱地所、1993、342 頁；『建築雑誌』462、1924、755 頁。

34) 堀勇良、2022、1484 頁。

彼の作品として判明する最初のものとして、母校東京高等工業学校（1929 年に東京工業大学）の同窓会組織が建設した蔵前工業会館がある（現存せず、図 4）。1931 年新橋駅前に竣工した会館は、その前年にコンペ（競技設計）がおこなわれて、吉本の案が一等賞（賞金 500 円）に選ばれているのである。建築家として審査にあたったのは委員長で工部大学校一期生の曾禰達蔵と、構造設計の大家の佐野利器、東京工業専門学校で教鞭を執っていた前田松韻である [35]。佐野の講評によれば、いずれの応募図案も「最高の努力を拂つた優秀作品なので、審査に當り其選擇に苦しんだ」もので、「外觀に就ては、極端に古い様式のなき代りに、又超モダン的の極端に新しい様式もなく、何れも中庸を得た堅實味のものばかり」であった [36]。完成予想図をみると、確かに建物は飾り気のない外観を基調とするが、切り欠いた角部分にはバルコニーと時計、そして表現主義風の垂直部材を配しており、まさにモダニズムと様式建築の中間という趣が感じられる。様式建築の曾禰と前田、構造家で装飾を排除したい佐野という両者の意向を汲んだ結果であろう。ただしもともとの吉本の設計図案がどのようなものだったかは不明で、彼のものを基準としてその他の入選作のアイディアを取り入れた上で、別途選定された三名の建築家が設計をおこない、工事監督も蔵前工業会館がおこなうものとされている [37]。つまり吉本は賞金こそ得たものの、実施設計や現場監督というもっともうまみのある仕事を得ることはできなかった。

表 1　吉本による主要作品一覧

竣工年	建物名称	所在地
1930	蔵前工業会館懸賞	東京市芝区
1935	尾張徳川美術館	愛知県名古屋市
1936	徳川納骨堂	愛知県西春日井郡
1936	常盤台住宅	東京市板橋区
1937	愛知銀行寄宿舎（有信寮）	愛知県名古屋市
1938	東京モスク	東京市渋谷区

図 4　藏前工業会館
（出典：藏前工業會館編、1943）

続いて彼の作品が確認できるのが名古屋周辺である。1935 年竣工の徳川美術館（図 5）を皮切りに、1936 年に尾張徳川家納骨堂（図 6）、1937 年に愛知銀行寄宿舎（現存せず、木造二階建て一部鉄筋コンクリート造）を完成させており [38]、独立後 10 年以上たってようやくまとまった仕事を任されていたことがわかる。とくに徳川美術館は、尾張徳川家の当主徳川義親が先祖代々伝えられた家宝を保存展示するために構想・設立したもので [39]、吉本が久しぶりに担当した大規模建造物だった。しかし、ここでの彼の立場は「主任技師」だったことが、今も美術館に残る銘文から読み取れる（図 7）。美術館建設の過程を研究した香山理絵によれば、

35) 藏前工業會館編『藏前工業會館創立十年史』藏前工業會館、1943、46-47 頁。

36) 同書、51 頁。

37) 同書、51-52 頁。

38)『愛知銀行 46 年史』東海銀行、1944、349-351 頁。

39) 徳川美術館については次の論文を参照。香山理絵「徳川義親の美術館設立想起」『金鯱叢書』41、2013。

図５　徳川美術館　旧館入り口（筆者撮影）

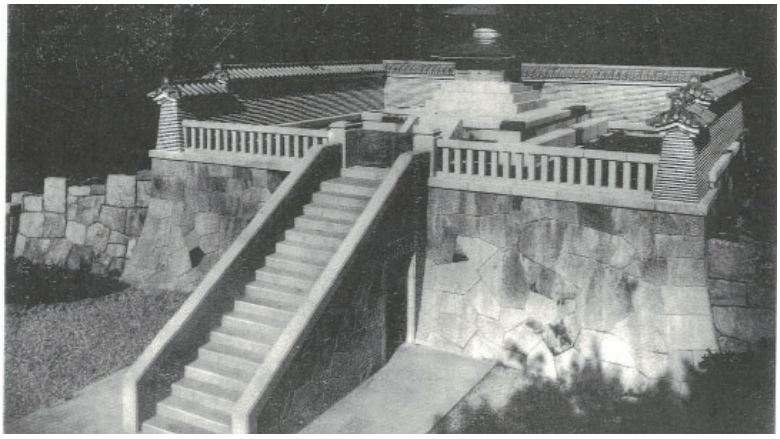


図６　定光寺尾張徳川家納骨堂（出典：石田潤一郎監修、2015、89 頁）

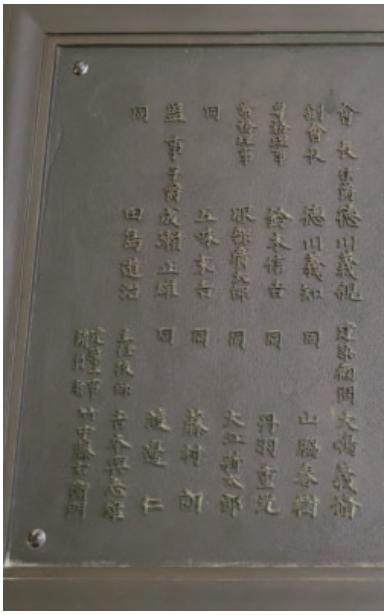


図７　徳川美術館銘文
（筆者撮影、下段左からに２人目に「主任技師　吉本與志雄」の名が見られる）

建設にさきだって1931年に競技設計が実施され、建築家では大江新太郎、藤村朗、渡邊仁が審査員に入った。設計案では徳川家側が用意した平面を元に外観をデザインすることが求められ、当初は「日本趣味ヲ加味」することが設計概要に加えられていたが、設計案の募集時にはこれは削除されている[40]。この直前には東京帝室博物館、現在の東京国立博物館の競技設計がおこなわれ、いわゆる帝冠様式である渡邊仁の案が採用されたことがよく知られている。この時期の日本では、「日本趣味」として鉄筋コンクリートの躯体に瓦屋根を乗せる帝冠様式が流行し、「素人」には人気がある一方で、モダニストたちはこれを苦々しく思っていた[41]。徳川美術館の競技設計ではこのような反発を配慮して「日本趣味」の条件が外されたと香山は推測する。だが最終的に佳作以上に選ばれた案の多くは和風の瓦屋根をもつものばかりであり、当初のもくろみ通り美術館は帝冠建築として建設された。審査員の大江は内務省技師として神社の修復や造営に関わった人物であるし、渡邊に至っては帝冠様式の東京帝室博物館を設計した張本人であるから、審査の結果は言わずもがなであった[42]。

このとき一等案に選ばれたのは佐野時平によるもので、これを元に実施設計をおこなったのが吉本與志雄である。佐野については建築学会にも所属していない経歴不明の人物で、学士号をもたない、建築実務に携わる人物だったと香山は推測する[43]。ちょうど蔵前工業会館で吉本が担った役割を徳川美術館では佐野が担当したわけで、一等賞金も同じく500円だった点も興味深い。このように当時の設計と施工は、多くの建築家や技師たちが共同作業としておこなうもので、与えられた図面を練っていって建物として実現させるという施工のプロセスは、三菱地所部で下積み時代を経験した吉本にとっては手慣れたものだったろう。そもそも、もう一人の審査員の藤村は、大量解雇後の三菱地所部にとどまってのちには社長に就任した人物で[44]、吉本の先輩にあたる人物であった。はるばる名古屋まで吉本が呼ばれた背景には、彼の優れた実務能力を知る三菱地所部時代のネットワークがあったとみてよいだろう。様式建築の最終形態ともいうべき帝冠様式の美術館建設には、様式を巧みに使いこなし、施主の要望にも柔軟に応えることのできる吉本のような中堅技師の存在こそが重要であり、彼は見事にその役割を果たしたといえる。

このとき徳川義親の知己を得たと考えられる吉本は、続いて尾張徳川家の菩提寺である定光寺に今なお存在する徳川家霊廟の設計も手がけている[45]。竹中工務店施工で1936年に完成した納骨堂は、城郭風の石垣の上段に築地塀を巡らせ、中央に小さな多宝塔を置くものである[46]。

40) 香山理絵「「徳川美術館設計」懸賞」『金鯱叢書』43、2015、111-113頁。

41) 井上章一『アート・キッチュ・ジャパネスク－大東亜のポストモダン』青土社、1987、75-77頁。

42) ちなみに渡邊仁は施主の徳川義親の学習院時代の同級生で、自宅や徳川黎明会本館を設計している。

43) 香山、2015、115頁。

44) 同書、124頁。

45) 尾張徳川家の170基もの墓所をひとまとめにしたもので、義親自身の遺骨もここに納骨された。中野雅夫『革命は藝術なり－徳川義親の生涯』學藝書林、1977、71頁。

46) 石田潤一郎監修『竹中工務店建築写真集』第4輯、ゆまに書房、2015、89頁。なお現状では多宝塔の上に覆屋が設置されている。上段へと続く階段の両脇には入り口が設けられていることから、骨壺は石垣下に置かれていると考えられる。

これもまたどんな建造物でも実現してみせる吉本の器用さを証明するものだといえる。

このような記念碑的な建築とは別に、同じころ吉本の事務所は、東武線沿線で近郊住宅地として開発された常盤台にモデル住宅を建設している。1935 年に内務省技師の設計に基づいて東武鉄道が開発した常盤台住宅地では、翌年から分譲地の売り出しが始められた[47]。そこでのモデル住宅として同年 5 月には住宅展覧会が開催されており、鹿島組や大林組などの大手に混じって吉本建築事務所も区画 263 番に平屋木造家屋を出品している[48]。外観は白塗りのモダン住宅で、玄関ポーチやガラス張りの縁側など、設計者の腕前を示す凝った意匠を取り入れているが、内部はごく一般的な中廊下式の和風家屋である（図 8）。常盤台住宅地には都心に通勤する高学歴の中流階級が住民となった場所で、彼らにアピールする場として東武鉄道出入りの業者が「腕を磨いて」モデル住宅を作ったという[49]。どのようにして大手に混じって吉本がここに参加できたのか詳細は不明だが、やはり三菱地所部関連のつてがあったと考えたい。ここでの宣伝は上々であったようで、翌年度には吉本建築事務所は二軒の建売住宅（区画 265 番、273 番）を販売した[50]。こちらはモダンなモデル住宅とは異なり、外観は下見板張りの純和風住宅で、一般向けを狙ったデザインを採用したことがわかる。だがいずれにしても、大手事務所から独立した気鋭の技師が手がけるにはいささか小粒な作品である。

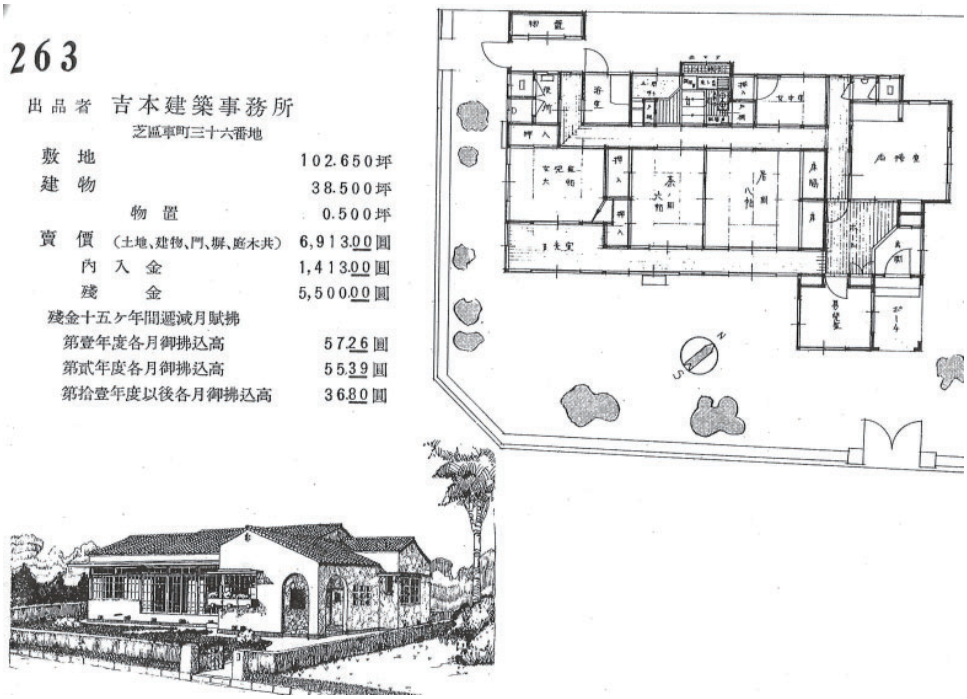


図 8　吉本建築事務所による常盤台のモデル住宅
（出典：板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編、1999、資料 1）

47) 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『常盤台住宅物語』板橋区教育委員会、1999、17 頁。

48) 同書、資料 1;『建築知識』2(5)、1936、19 頁。

49) 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編、1999、106 頁。

50) 同書、資料 2。

実は彼が事務所を立ち上げた1920年代から30年代にかけて、日本の建築界は一つの転換点を迎えつつあった。19世紀から20世紀初頭にかけて建築デザインの源泉となっていたのは歴史様式であり、建築教育でもその習熟が重視され、さまざまな様式を操ってバランスよく組み合わせることができる人物こそが優れた建築家だった。吉本が務めた三菱地所部やそこで技師長だった櫻井小太郎などはまさにその代表であり、新古典主義やチューダー様式などを巧みにオフィスビルや銀行建築に当てはめていくことで、次々とオフィスビルなどの都市インフラを供給していったのである[51)]。中堅技術者としての教育を受けた吉本は、このようなリーダーや大規模事務所のもとにあってこそ力を発揮できたが、もっとも油の乗った時期に三菱地所部を退職することを余儀なくされ、活躍の機会を奪われていた。

また吉本が学校を卒業した1916年は、建築デザインが一大転換点をむかえる直前の時期だった。1910年代後半とは学生たちが卒業設計に様式建築を作成した最後の年代にあたり、少し後の1920年代からは装飾をそぎ落とした表現主義、そしてモダニズム建築の意匠が広がりをみせるのである[52)]。つまり吉本が得意にした様式建築のデザインは、徐々にではあれ社会におけるニーズが減じており、他方未だに様式建築が用いられる公共建築の設計は櫻井のような年長の大家たちに任されていた。

さらにこのモダニズム建築などの新たな建築意匠は、物によってのみならず言葉によっても宣伝されるものであった。たとえば吉本とほぼ同年代の東京帝大建築学科の6人の卒業生（石本喜久治・堀口捨己・滝沢真弓・矢田茂・山田守・森田慶一）は、1920年に日本における近代建築運動の先駆けとなる「分離派建築会」を結成して、次からはじまる宣言を掲げた。

> 我々は起つ。
> 過去の建築圏より分離し、総の建築をして真に意義あらしむる新建築圏を
> 創造せんがために。[53)]

青年独特のやや空回りした宣言は、彼らが帝大卒のエリートであったからこそ受け入れられて社会に大きな反響を生むものだった[54)]。同時に社会運動と連帯していくその運動は、次第に生硬な社会改革の理念が先行し、言葉で建築するようになっていったとも村松貞次郎は批判的に考察する。彼らは実作の機会も持たず、仮に造ったとしても惨めなものになったというのである[55)]。だが言葉で建築理論を戦わせ、モダニズムという新たな形態を確立し、活躍の場を得ていくエリート建築家たちに対して、実務家である吉本は十分な言葉をもたない技術者であり、建築界の表舞台に出ることはなかった。

---

51) 櫻井小太郎については次の研究を参照。河東義之「櫻井小太郎」丸山雅子監修『日本近代建築家列伝』鹿島出版界、2017、109-116頁。

52) 井上章一、1987、86頁。

53) 稲垣栄三『日本の近代建築－その成立過程』下巻、鹿島出版会、1979、291頁。

54) 村松貞次郎、1977、164頁。日本人で最初の建築論に目覚めたのは伊東忠太で、1892年の卒業論文「建築哲学」は美を論じるものだった。藤森照信『日本の近代建築』下巻、岩波書店、1993、6-7頁。

55) 村松、1977、166-167頁。

「古い技術」になりつつある様式建築しか知らない吉本は、おそらく記録には残らない小規模な住宅・商業建築を手がけつつ、ときたま三菱地所部時代のネットワークから徳川美術館のような大きな仕事を紹介されていたのであろう。また、副業として吉本はふたつの建設関連の特許技術を取得し[56]、加えて奇妙な論文も投稿している。1934 年 4 月発行の『醤油と味噌』第 3 巻第 4 号に寄稿した論文「北鮮羅津の重要性を論ず」[57]では、前年秋に「ぶらつと北鮮を旅行し」たことを述べ、満州国と日本の交通のため羅津港が重要であることを主張している。ところがその内容は極めて概説的な地理関係の紹介や、航空路としても羅津が要衝にあることを述べるもので、本業であるはずの建築や港湾施設についての記述はまったくない。そもそも『醤油と味噌』はそのタイトルが示すとおり、醤油や味噌の醸造技術に関する論考が中心の雑誌で、ほぼ食品産業とは関わりのない内容の論文を吉本が寄稿した理由は不明である。なんらかの人的なつながりを通して論文を掲載した可能性が高く、また論文には原稿料が支払われたと考えられるから、これもまた副業のひとつだったとみられる。

さらにうがった見かたをすれば、吉本の朝鮮行きは求職活動の一環だったのかもしれない。この時期多くの日本人建築家が海を渡って朝鮮半島や満州、中国大陸に活躍の場を求めていたことは、西澤泰彦の一連の研究に詳しい。しかし満州と中国東北部は満鉄の建築組織が縄張りとして押さえていたため、吉本のようなフリーの建築家が大規模な建築設計を受注できる見込みはなかった[58]。また朝鮮半島では中村與資平が最初の民間建築事務所を開いて成功したが、民間資本が蓄積されていない朝鮮半島での仕事の獲得は難しく、中村も銀行や学校など公共性の高い建築を受注することで事業を継続させた[59]。また帝大建築学科卒で第一銀行京城支店、のちの朝鮮銀行本店の現場監督をおこなって実績のあった中村と違って、吉本は三菱地所部に所属していたとはいえ現地での実績に乏しく、渡海して仕事を得られる可能性はほとんどなかったと考えられる。

3.　東京モスクの建築的特徴と吉本の選定

ではなぜ、吉本與志雄というほぼ無名の建築技師が、国策建築である東京モスクの設計者として選ばれたのであろうか。このことを考える前に、まず東京モスクの建築的特徴をみていきたい。

建築学会の会誌である『建築雑誌』には、竣工間もない東京モスクが紹介された記事が掲載されている[60]。筆者の名前は現れないが、内容からみて間違いなく吉本が書いたものである。ここには正面と側面からの立面図、1 階と 2 階の平面図、ミナレットと内部の断面図と内部詳細図も付されている（図 9-12　東京モスク図面）。モスクは木造と鉄筋コンクリート造が混在した 2 階建てで、ミナレットは鉄筋コンクリート 5 階建てである。入り口を入ったすぐの所に一本のミナレットがそびえ、奥の礼拝室は大ドームで覆われていた。入り口脇には階段があり、

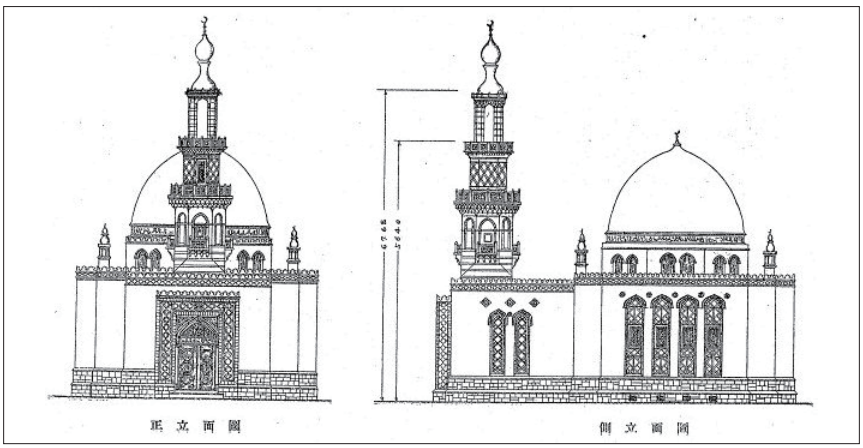
56) 1930 年特許取得のプレハブ基礎と、1932 年特許取得の天幕の 2 点が確認できる。『発明 = The Invention』69(11)、1972、33 頁 ; 堀勇良、2022、1484 頁。

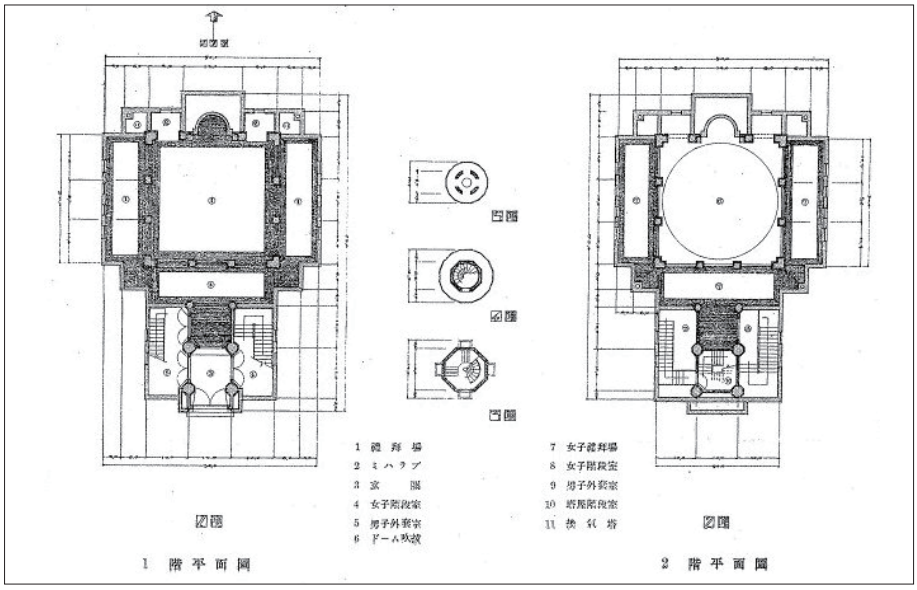
57) 吉本與志雄「北鮮羅津の重要性を論ず」『醤油と味噌』3(4)、1934。

58) 西澤泰彦『海を渡った日本人建築家』彰国社、1996、168 頁。

59) 同書、165-167 頁。

60) 吉本與志雄 (?)、1938、1067-1071 頁。





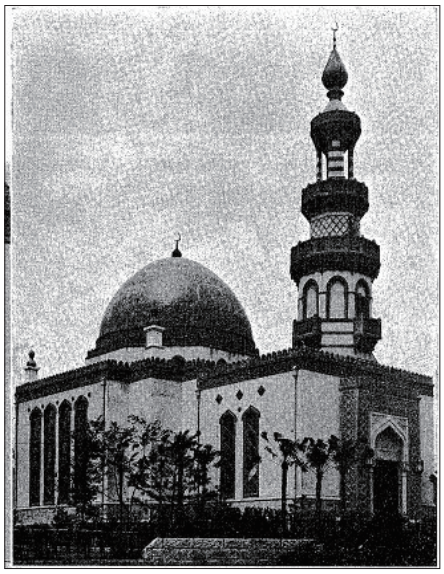


図 9（上）
立面図

図 10（中）
平面図

図 11（左下）
外観写真

図 12（右下）
ミフラーブ

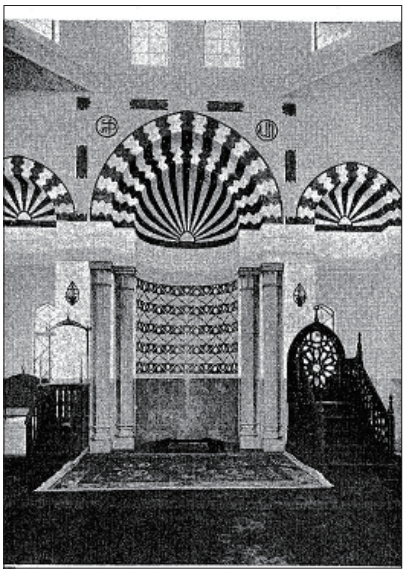


図 9-12　東京モスク図面（出典：吉本與志雄 (?)、1938、1067-1071 頁）

二階の礼拝室は婦人用となっていた。ドームとそれを支える柱、およびミナレットは鉄筋コンクリート造だったが、日中戦争の影響で鉄鋼の使用が 50 トンまでに制限されてしまったため、その他の部分は木造となり [61]、一説によればこれが原因で構造の継ぎ目の部分に雨漏りが生じて建物の寿命が縮められた [62]。

平面は礼拝方向を指し示すミフラーブを軸として左右対称形である。図面を精査した五十嵐あすかによれば、建物の外法寸法は 15720mm × 23200mm で、これは芯々寸法で 50 尺× 75 尺になる。またミフラーブはきちんとカアバ神殿のあるキブラ方向に向けられているため、周辺道路に対して傾いた状態で建物は配置されている [63]。ドームの頂点までの高さは 17.1 メートル、ミナレットの頂点までの高さは 20.5 メートルで、吉本本人が周辺の住宅に配慮して塔の高さをおさえたためプロポーションに多少の無理があると述べている。淡青色ないし緑色のドームの外部には鋼板を貼る予定だったが、後述する鉄材の使用制限のためタイルが用いられた [64]。さらにその下には八角形ドラムが立ち上がり、ドームとドラムの間の帯にはクルアーンの字句を模様化してモザイクタイル張りにしたという。跪拝して祈る室内にはカーペットを敷き、ミフラーブ上部の半ドームとアーチはぎざぎざの白と赤の帯で飾られている。

ここで東京モスクに先行して完成した神戸モスクと比較すると、四角い建物の上にドームを乗せる点や、上階を婦人用礼拝室とする点、ドームまでの高さ（神戸モスクは 60 尺（約 18.2m））など、ある程度の類似性が感じられる。だが神戸モスクでは、建物全体が堅牢な鉄筋コンクリート造であったこと、キブラではなく道路を基準に建てられていること、ミナレットは玄関両脇に 2 本建てられていること、ドームの内側が建物内部からは見えないいわゆるハリボテである点など、相違点も多い。宇高雄志によれば、神戸モスクの設計図は当初竹中工務店によって作成され、これにチェコ人建築家のシュヴァーグルが大きく手を加えて最終案が完成した [65](図 13)。入り口ファサードを 2 階部分まで含むジャイアントオーダーとし、その両脇にミナレットを配する点や、タマネギ型のドームを用いた点は、ペルシア建築の影響を強く受けた

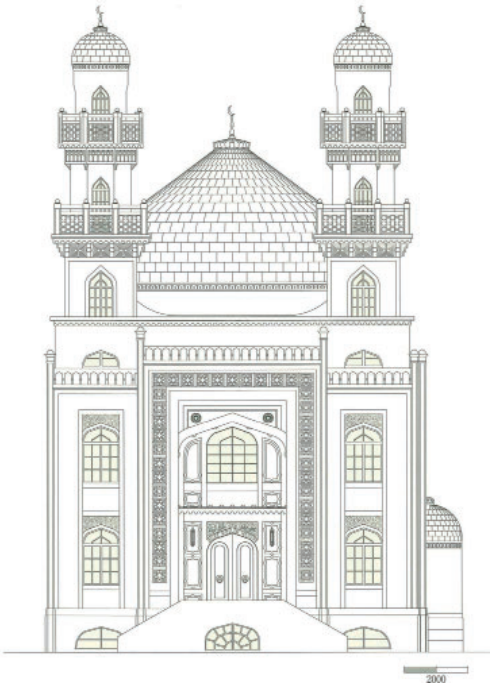


図 13　神戸モスク立面図
（出典：宇高雄志、2018、89 頁）

61) 同論文、1068 頁。

62) 五十嵐あすか、2020、36 頁。

63) 同論文、32 頁。

64) 吉本與志雄 (?)、1938、1068-1069 頁。

65) 宇高雄志、2018、86-97 頁。

インド・ムスリム建築を想起させる。施主がインド系ムスリムであったためだろう。だが中国風なミナレットの欄干や、ミンバル（説教壇）の欄干と宝珠、ミフラーブまわりの幾何学装飾など、デザイン全般は独特なもので、深見奈緒子はこれを、シュヴァーグルが日本風にアレンジした1930年代極東のイスラーム建築だったと高い評価を与えている[66]。

一方で、東京モスクについての深見の評価は低い。神戸モスクと比較すると東京モスクは「イスラーム建築のモニュメント集成から、部分ごとに取り出し、それを建物に貼り付ける」もので「既存の建物からの借り物を再集成した」と酷評している[67]。この見解は正に慧眼というべきで、実は吉本本人もそのことを、起工式を紹介する1937年10月17日の読売新聞の次の記事で認めているのである。

> 此のマスヂドは回教禮拜堂の代表的形態を餘す所なく象徴具現すべく設計されたもので先づ塔は回教の聖地メヂナのマホメットの塔をそのまゝに、又ドームはエヂプトのイブノ・トーロンのそれを、更に正面の教長室はエヂプトアヅハル大學のマスヂドのそれを夫々形取つた外、ドームの廻り、入り口および堂の内壁一面にコーランの聖句を印刷すると云ふ荘厳華美なもの[68]

新聞記者がここで書かれる具体的な建築知識を持っていたとは考えにくいから、これは設計者の吉本與志雄本人から聞き取ったものとみてよいだろう。つまり吉本は何らかの手段で集めた写真・図面類を参考にし、それぞれをつなぎ合わせて東京モスクのデザインをおこなっていたのである。

ここで再び思い起こす必要があるのが、1930年12月の幻のモスク図面である。クルバンガリーとその周辺が用意したと考えられる立面図からは、不鮮明ながらも入り口とそのそばのミナレット、ドームのある礼拝室という構成が読み取れ、外観は二色の縞模様となっている。全体的にちぐはぐな印象を受けるもので、有名建築の各部位を切り貼りしてこしらえたものと考えてよいだろう。施主である在日タタール人たちの頭には統一的にデザインされたモスク建築があったわけではなく、「わかりやすい」デザインのつまみ食いが求められていたのである。

すると吉本與志雄が設計者として選定された理由もはっきりする。第一に、デザイナーは施主たちの意向を素直にくみ取り、建物として実現してくれる人物でなければならない[69]。この点で様式建築を専門とし、モダンな都心のオフィスビルや帝冠様式の美術館、果ては城郭風の納骨堂まで、なんでも手がけた器用な吉本は、モスクという日本人にとって未知の建築を建てる上では適材であった。たとえば独自様式の神戸モスクを設計したシュヴァーグル、あるいは築地本願寺をインド様式で建てた老大家の伊東忠太などでは、作家としての個性が勝ちすぎてしまいクルバンガリーらが望むモスクを建てることができない。また気鋭のモダニズム建築家

66) 深見奈緒子、2005、272頁。

67) 同書、273頁。

68)「愈よ東京に建つ　回教禮拜堂」『読売新聞』1937年10月17日夕刊第4面。

69) モスクの紹介記事で、吉本は「回教徒の風俗習慣を調査する必要上回教徒の人々と接近して」いたことを述べており、施主との交流があったことがわかる。吉本與志雄(?)、1938、1067頁。

に設計を依頼するのも論外だろう。国策として支援しているイスラームの礼拝堂であるにもかかわらず、白い豆腐のような無国籍無宗教の建築が出来上がってしまえば、その内外に向けての宣伝の効果は激減してしまう。あくまで東京モスクはモスクらしい、一目でそれとわかるものでなければいけなかった[70]。

都合のよい建築技師として吉本が選ばれる上では、やはり三菱地所部のネットワークが生きたと見るべきだろう。先述したように、モスクの建設にあたってクルバンガリーは三菱をはじめとする財閥から多額の寄付金を得てこれを実現させた。とくに三菱銀行の瀬下清が大きな支援を寄せていたことから、優秀な技師として系列企業出身者の吉本に白羽の矢が立ったと考えられる[71]。両者の結びつきの強さは、竣工翌年に吉本が瀬下の肖像画を描かせてモスクに隣接する回教学校に寄進したことからもうかがえる[72]。

では、情報の収集が容易ではない1930年代の日本で、しかも建築関係者にとってもほぼ未知のイスラーム世界の建物について、彼はどのように学んだのだろうか。1930年の立面図と、実際に完成した東京モスクの姿は大きく異なっており、タタール人以外からの情報収集が必要だったことは明らかである。

まずはエジプト建築の諸要素から検討していこう。新聞記事においてドームと教長室（ミフラーブのことか）のデザインソースとして挙げられている、イブン・トゥールーン・モスクとアズハル・モスクはいずれもカイロの代表的な建築作品で、戦前期から様々な媒体で紹介されている。実はこの時期、日本と欧州を結ぶ航路はスエズ運河を通っていたため、日本人建築家たちもエジプトに立ち寄ることが多かったのである。中でも京都帝国大学で教鞭を執った日本建築史家の天沼俊一は、1921年欧州旅行の帰路エジプトに滞在しており、1927年には『埃及紀行』として見聞した建造物の写真や図面を紹介している[73]。このうちイブン・トゥールーン・モスクについては中庭とそこにある「水盤」（礼拝前のウドゥをおこなうもの）を覆うドームの写真が紹介されている[74]（図14）。吉本はこのような写真を見て、東京モスクのドームに応用したと考えて間違いない。一方ミフラーブの写真は天沼の著作には掲載されていないものの、アズハル・モスクの中を見渡すと、その付属モスクとして14世紀に建てられたタイバルスィーヤ・マドラ

70) 山下王世は、最新のシェル構造が用いられたモダンなデザインのモスクがトルコの宗教保守派によって受け入れられず、建設途中で爆破されたという興味深い事例を紹介している。山下王世「トルコ共和国のモスクデザインにみられる諸課題」『日本建築学会計画系論文集』73 (626)、2008、862頁。東京モスクの後継の東京ジャーミーが古典的なオスマン様式であるように、モスクのデザインには歴史的な様式が用いられることが多い。

71) もう一つの紹介ルートとして、モスク建設の直前に自身の施主だった徳川義親も想定できよう。実は徳川義親は貴族院議員もつとめながらも、議会政治打倒と革命を主張する軍人や国粋主義者に巨額の資金を与えて支援していた人物で、特に大川周明との親交が深かった。だが彼の名前は1938年のモスク献堂式の出席者には見いだせず、モスク建設に関与したとも考えられない。徳川の盟友の大川は、1932年の5.15事件に関与したとしてすでに逮捕されており、軍内部でのクーデターを支援する徳川は国粋主義運動に対する影響力を失っていた。またモスク建設の後ろ盾だった頭山満の黒龍会はかつて徳川のスキャンダルをもとに、脅迫・恐喝を仕掛けており、徳川が建築技師を紹介する関係にあったとは思われない。

72) 五十嵐あすか、2020、38頁。

73) 天沼俊一『埃及紀行』岩波書店、1927。

74) 同書、42頁。

サのミフラーブが酷似していることがわかる(図 15)。小さい半ドームの外側に段差をつけて尖頭アーチが乗り、そこから下に向かって柱が置かれる全体の構成や、放射状に広がるぎざぎざの二色の帯状の装飾が共通しているのである。実はオリジナルのミフラーブは赤白二色ではなく、白・茶・黒・青の多色の石を用いているのだが、白黒写真ではそこまでは読み取れなかったのであろう。また半ドーム下の細かい幾何学装飾や、放射状の帯飾りの基点にある「アッラー」の文字は割愛されている。これも写真からは復元できないものである。

図 14　イブン・トゥールーン・モスク　中庭と水盤のドーム
（出典：天沼俊一、1927、42 頁）

図 15　タイバルスィーヤ・マドラサのミフラーブ
（出典：https://www.archnet.org/sites/2311?media_content_id=644328）

塔＝ミナレットのデザインについては、記事の内容を信じるのであれば、マディーナの予言者モスクのミナレットを参照したことになる。ところが、アラビア半島の両聖都であるマッカとマディーナは当時から異教徒の立ち入りが禁じられる禁域であり、ここにある建造物については西洋人の建築書でも紹介されることがまれである。たとえば当時建築史の教科書としてよく用いられ、和訳もされたフレッチャーの『建築史』にも両聖都の建物は登場しない[75]。吉本は一体どうしてその姿を知ったのだろうか。

まず考えられるのが、設計時に接触した在日タタール人らが私蔵する写真類を参照した可能性である。また日本人巡礼体験者からの情報も見逃せない。1909 年末に日本人ハッジ第一号となった山岡光太郎は『世界の神秘境 アラビヤ縦断記』を上梓している[76]。マッカの後にマディーナ（「メヂナ」）を訪れた山岡は、「メヂナ」大礼拝殿、すなわち預言者モスクがマッカのものと比較しても「雄麗遙かに後者を凌ぎ」、「稀代の大建築物」であると伝える[77]。ただし彼はミナレットに関しては何も述べず、写真も付されていないため、吉本がその著作を直接参照したとは考えられない。一方、預言者モスクのミナレットの姿を含んだ写真は、回教圏研究所が編纂した『回教圏史要』に見られる。本書の発行は東京モスクの竣工後であるものの、ここ

75) フレッチャア（古宇田實・齋藤茂三郎訳）『建築史』岩波書店、1919。

76) 山岡光太郎『世界の神秘境－アラビヤ縦断記』東亜堂書房、1912。

77) 前掲書、227 頁。

図 16　預言者モスク　全景（出典：回教圏攷究所編、1940、口絵二）

に見られるような聖都の写真がそれ以前から日本には存在しており、吉本が参照した可能性は指摘できる。モスクの全景をとらえた写真には大ドームとともに 2 本のミナレットが写っており [78]、デザインソースとして興味をひいたのかもしれない（図 16）。

ところが実際に出来上がったミナレットを見てみると、これは預言者モスクのものにはあまり似ていないのである。むしろ二段のバルコニーや頂部の玉飾りの形状などは、天沼の著作に記載されているアズハル・モスクのカーイトバイのミナレットにならっているとも思われる [79]（図 17）。ただしこちらも細かい装飾は読み取れなかったようで、イスラーム建築の特徴のひとつであるムカルナス装飾などは割愛されている。さらに入り口の上に 1 本だけミナレットを乗せると

図 17　アズハル・モスク、カーイトバイのミナレット（出典：天沼俊一 1927、43 頁）

78) 回教圏攷究所編『回教圏史要』回教圏攷究所、1940、口絵二。

79) 天沼俊一、1927、43 頁。

いう構成はモスクとして異例である。神戸モスクにならって両脇に2本配する方が収まりがよいだろうが、吉本は「シンメトリカルに塔を付することになると実際的で無い」ため1本としたと述べる[80]。この点は経済的制約がデザインに影響を与えたのであろう。

このように入手可能な写真や図面をつぎはぎして建物をデザインしていく行為は、オリジナリティーに欠けると非難されてもいたしかたないだろう。だがその一方で、モスク建設のはるか前から青写真が存在していたことから、施主であるクルバンガリーたちはある程度モスクの姿をイメージしており、吉本はこれに沿ったかたちで設計することを余儀なくされたことは間違いない。側面からみた青写真のファサードは順に、入り口、ミナレット、前室、ドームのある主礼拝室から構成されていて、実際の東京モスクの平面もこれを踏襲しているのである。明らかに収まりの悪いちぐはぐな姿は、素人が持ちこんだ図面を実現した結果といってよいだろう。ほとんどのデザインがマムルーク期エジプトの建造物から取られたのは、写真や図面が容易に入手できたこと、またクルバンガリーと対立していたイスハキー一派がトルコ政府との関係が深く、オスマン様式を用いたくなかったなどの事情が推測できる[81]。

有名建築からの切り抜かれた各部位が全体を構成したとの評価も、たしかにその通りである。だが、コンドルが日本にもたらした様式建築とは本来そのようなものだった。稲垣栄三は明治初期の時代の建築家たちが「過去様式のパターンを豊富に持合わせながら、それを駆使する強固な設計理論や一貫した目標は欠けていた」ことを指摘し[82]、「建築の設計される過程は、各種のパターン・ブックからの寄せ集め」だったとする[83]。吉本が学んだ様式建築とは本質的に模倣するものであり、その組み合わせの巧拙が設計者の腕の見せ所だったのである。施主の意向が強くはたらき、「わかりやすい」シンボリズムが望まれた東京モスクという建築作品には、はやりのモダニスト建築家ではなく古い建築デザインの技術をもつ吉本與志雄こそが、適材だったのである。

4. 施工業者師田組

ここで東京モスクの施工者についても簡単に触れておきたい。建築を建てるうえで、施主と設計者に加えて重要なのが実際に建設をおこなう施工者の存在である。東京モスクを施工したのは師田組という、これもまた一般には知られていない業者であった。吉本が関わった徳川家関連の建物が竹中工務店によって施工されていたこと、また神戸モスクも竹中工務店が基本設計をおこなったのちに施工したという事情を踏まえると、東京モスクの施工を竹中工務店がおこなうという選択肢があってもよかったと思われる。

しかし師田組は、明治期以降福井県を拠点としつつも、全国規模で建設事業を請け負っていた中堅の建設業者だったことが明らかになっている。主な施工実績には福井県の禅寺として有名な永平寺の伽藍整備があり、長野善光寺の仁王門と宿坊の新築工事、また北海道北見でも

80) 吉本與志雄 (?)、1938、1067 頁。

81) ただしこの時期のトルコ共和国は国父アタテュルクの元で世俗化政策を推進しており、トルコ政府が積極的にモスク建設を後押しした可能性はまったく考えられない。開堂式にもトルコ政府関係者は参加しなかった。

82) 稲垣栄三『日本の近代建築－その成立過程』上巻、鹿島出版会、1979、99 頁。

83) 同書、112 頁。

神殿建設を受注しており[84]、東京モスクの建設にも十分対応できる業者だった。また東京モスクの竣工直後の 1939 年には、伊東忠太の設計で東京都府中市にある東郷寺客殿を施工している[85]。鉄材の利用制限によって建物の一部を木造にせざるを得なかったという事情により、木造の宗教建築施工で抜群の実績を持っていた師田組に声がかかったとみてよいだろう。1939 年に東郷寺の施工をおこなったという点もまた、師田組のチームがモスク完成後も東京にとどまって建設事業を継続していたという事情をうかがわせる。

5.　戦中の吉本

1938 年 5 月に吉本は東京モスクを見事に完成させたものの、彼の建築家としての足跡はここで途絶えてしまう。前述したように日中戦争勃発の影響で、1937 年 10 月には「鉄鋼工作物築造許可規則」が公布されて鉄鋼材の利用が制限されてしまったため、軍需関係施設以外の建築がほとんど建てられなくなってしまったのである[86]。吉本のみならず、建築家たちは村野藤吾のような一流の建築家も含めて仕事に窮し、東京帝大の卒業生ですら就職が困難であった[87]。設計を実現する機会に恵まれない彼らは、丹下健三案が一等に選ばれたことで知られる「大東亜建設記念営造計画」などの競技設計に参加することでかろうじて腕を磨き、戦後の活動に向けて下地を作っているのがせいぜいであった。

ところが東京に国策建築を完成させた吉本には、別の道が用意されていた。かつて所属した三菱地所が 1943 年 10 月に上海出張所を開設して、その所長に納まったのである[88]。しかもそれ以前から吉本は上海で活動していたとみられ、1942 年 3 月には「上海海軍武官府特別調査部」に「吉本建築事務所所長兼三菱地所株式会社嘱託」の肩書で総務として所属している[89]。特別調査部とは、上海で対ユダヤ工作に従事したことで知られる犬塚惟重大佐によって率いられていたいわくつきの組織で、ユダヤ系のサッスーン財閥が管理する上海市内のビルを日米開戦直後に多数接収したため、三菱地所に管理維持を協力要請していた[90]。この時、吉本以外にももう一名が特別調査部に総務として参加していたことが確認できる[91]。実は犬塚大佐は、東京モスク竣工の直前に立ち上げられた「回教及猶太問題委員会」の幹事であったから[92]、モスク建設を通じて早くから吉本と面識があった可能性も指摘できる。吉本の上海での新たな仕事は建

84) 日向進編著『永平寺建造物調査報告書』大本山永平寺、2018、227-232 頁。

85) 府中市教育委員会編『府中市の歴史的建造物』府中市教育委員会、2009、183 頁。

86) 井上章一、1987、111 頁。

87) 同書、116-117 頁。

88) 三菱地所株式会社社史編纂室、1993、466 頁。なお堀勇良は 1939 年に吉本が三菱地所上海事務所所長となったとするがこれは誤り。堀勇良、2022、1484 頁。

89) 犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作』日本工業新聞社、1981、396 頁。堀勇良の履歴によれば吉本は 1942 年まで東京で個人事務所を主宰していた。ビル管理の業務委託のため、この年完全に上海に拠点を移したとみてよいだろう。堀勇良、2022、1484 頁。

90) 三菱地所株式会社社史編纂室、1993、467 頁。

91) 犬塚きよ子、1981、396 頁。

92) 阪東宏『日本のユダヤ人政策 1931-1945』未來社、2002、119 頁。

築デザインではなく、接収されたビルの管理というメンテナンス業務であった。

もっとも吉本がこのような軍部の委託する仕事に従事するためだけに上海に渡ったというわけではないだろう。都市計画史家の越沢明によれば、1937 年の第二次上海事変以降、上海は外国租界を除いて日本軍によって占領されており、日本の傀儡政権を各地に樹立するかたわらで、興亜院を中心に上海を含む主要都市の都市計画が立案された。いずれも日本から内務省と大学のスタッフが派遣され、上海では国民党政府時代の 1929 年に決定された大綱を引き継いで新都市建設計画が立案されている。日本側からは当時都市計画行政のトップだった池田宏を含む大勢のメンバーが派遣され、1942 年には都市計画の大家である石川栄耀らが中心となった計画要綱がまとめられた[93]。このほかにも 1939 年からはモダニスト建築家の前川国男の事務所が都市計画に携わって上海分室を開室していた[94]。このように戦争の影響で日本国内において仕事の機会を失った建築家らにとって上海は新天地となっており、吉本もまた自身の事務所の上海支部を開設して設計業務を継続していたと考えられる。

6. 戦後の吉本

1945 年 8 月 15 日に日本が敗戦を迎えると、物故者を除く東京モスクに関わったほとんどの人物の運命も急転する。イブラヒムと頭山満、瀬下清はかろうじて天寿を全うしたが、満州に追放されていたクルバンガリーはソ連軍にとらえられ、献堂式で回教徒万歳を唱えた松井石根は南京虐殺の責を負って処刑され、式を取り仕切った葛生能久や、海軍の小笠原長生も連合軍による公職追放処分を受けた。礼拝に訪れていた亡命タタール人たちも、1953 年にトルコ国籍が付与されるとトルコや米国、オーストラリアへと移住するものが相次ぎ[95]、国策の中心にあったモスクは一転して負の遺産と化してしまった。

では東京モスクの完成後、上海へと転じていた吉本與志雄はどうなったのであろうか。国策というひとつの仕事のよりどころを失い、本業の建築デザインも時代遅れになりつつあった彼の前途にもまた、苦難が待ち構えていたのだろうか。だが吉本の後半生は、むしろ恵まれたものだった。またしてもここで彼を救ったのが三菱地所部に勤務していたという経歴だった。

敗戦時にはすでに上海から日本に戻っていたと思われる吉本は、早くも 1945 年 8 月末には岡山県の水島に派遣されている[96]。海軍から航空機生産能力の拡大を依頼された三菱重工は、岡山県からの誘致を受けて、1943 年には高梁川の河口に水島航空機製作所を完成させていた[97]。現在水島工業地帯として知られるこの場所の戦後処理を担当するになったのが、同じく三菱出身の吉本だったのである。航空機の工場は戦中に空襲で被害を受けたとはいえ、広大な敷地には寮や社宅、付属工場に加えて鉄道や水道も残されており、しかもその所有権は戦後は国にあった。だが国にはこれを管理運営する能力がなく、三菱重工による管理が軍政治部に

93) 越沢明『植民地満州の都市計画』アジア経済研究所、1978、179-184 頁。

94) 井上章一、1987、266 頁。

95) 松長昭、2009、59-60 頁。

96) 水之江季彦・竹下昌三『水島工業地帯の生成と発展』風間書房、1966、78 頁。

97) 前掲書、8 頁 ; 三菱地所株式会社社史編纂室、1993、460-461 頁 , 550-551 頁。

よって許可されなかったため、別会社を立ち上げて管理活用がはかられることとなって、吉本が連合軍と大蔵省との交渉を担ったのである[98]。その受け皿となる水島工業都市開発株式会社が1947年4月に設立されると吉本は社長に就任している。だが工場跡地や施設は徐々に会社の管理から離れて、残された水島鉄道も赤字となると倉敷市がこれを買収して1952年に会社は解散した[99]。ここでの彼の役割は建築設計ではなく、企業経営者としてのそれであり、デザインからマネージメントへと活動の場を移していたことがわかる。またこの間には東京の電気工事関連会社の社長にも就任している[100]。

このようにオールマイティーな能力をもつ吉本は、続いてすぐさま東京国際空港（羽田空港）の建設に携わる。米軍から空港の諸施設が日本に返還されると、1953年に空港ターミナルビルの建設が決まり、その運営会社である日本航空ビルデング株式会社が設立されて取締役に選任されているのである[101]。新ターミナルビルの設計は指名競技設計となり、吉本は設計する側ではなく審査する設計小委員会のメンバーとしてこれに関与した。興味深いことに小委員会の委員長は、安田講堂をはじめとする多くの東京大学キャンパス内の建物を設計して、後に総長となった内田祥三がつとめ、ほかにはかつて分離派建築会に参加し京都タワーなどのモダニズム建築で知られる山田守が委員に含まれている[102]。だがこれらの建築アカデミズムの中枢にいた人物たちと同席する吉本の肩書きは「日本航空ビル取締役」であり、やはり建築家としての腕が買われたのではなく、企業側の実務家として認識されていたことはあきらかだろう。1955年にターミナルビルが完成した後も吉本は会社にとどまり、1964年に同社の専務取締役を辞している[103]。また1955年からは同社の子会社である日本航空食堂の社長もつとめ、関連企業を設立の上で最終的にこれらと統括した東京エアターミナルホテル社の社長となって1965年に引退した。その後はかつての建築事務所の名称を改めた思われる「建匠社」の会長となったのち、1973年12月に78歳で亡くなった[104]。

戦後の吉本はもはやほとんど建築設計に携わることはなく、実業家として戦後日本の経済界を生きた人間である。だが、水島工業地帯の処理や、米軍に返還された東京国際空港の整備など、関わった大きな仕事のいずれもが日本の戦後処理に関わるものだったことは興味深い。また、戦後の日本における一つの政治的転機だった60年安保時の1月16日、岸信介首相の渡

98) 水之江・竹下、1966、81-82頁。

99) 前掲書、160頁。

100) 国勢協会編『国政総覧第10版』国際連合通信社、1954、995頁。

101) 日本空港ビルデング株式会社『東京国際空港ターミナル・ビル十年の歩み』日本空港ビルデング株式会社、1965、32頁。のちに社長に就任した元運輸事務次官の秋山龍によればターミナル・ビル建設と運営のため「元三菱地所の技師をやられた吉本与志雄氏」らを招いたという。日本航空協会編『日本民間航空史話』日本航空協会、1966、445頁。

102) 日本空港ビルデング株式会社、1965、40-41頁。

103) 前掲書、資料編、18頁。

104) その他に国際線機内食を納入するコスモ企業社の社長もつとめている。人事興信所編『人事興信録第27版』下巻、人事興信所、1973; 帝国興信所編『帝国銀行・会社要録第45版』帝国興信所、1964、237頁；堀勇良、2022、1484頁。建匠社の代表取締役は同じく建築を学んだ四女がつとめていた。

米に反対して空港食堂を占拠したデモ隊に対して、吉本は日本航空食堂社社長として退去を要求するという珍奇な役回りを担わされている[105]。建築技師としてキャリアをスタートしたはずの吉本は、戦前の回教政策や、戦中の上海、戦後の安保闘争など、折に触れては日本近現代史上の重要な場面にちらりとその姿を現す波乱に満ちた人生を送っていたのであった。

おわりに

以上、東京モスクという戦前日本にあらわれた特異な建築と、そこに関与した吉本與志雄というひとりの建築技師の生涯をたどってきた。日本の対イスラーム政策や在日タタール人という点から着目されてきた東京モスクは、同時に日本における建築デザインの変遷や中堅技師のキャリア、そしてその戦争への協力を知る手がかりをも与える多面的な建物でもあった[106]。明治期日本に導入された様式建築がその命脈を絶たれ、その後モダニズム建築が隆盛を極める決定的な転換点が日中戦争とそれに続く第二次世界大戦であったことを考えると、有名イスラーム建築を切り貼りしてできた東京モスクとは、実は日本における最後の様式建築のひとつだということができるだろう。

東京モスクにはしかし、モダニズム建築の理念が受け入れられつつあった日本の建築界では、建設当初から厳しい目が向けられていたようである。直近の建築界の情勢を紹介する『建築年鑑』1939 年号では、吉本の同世代で分離派建築会にも参加した滝沢真弓が「とにかくサラセン式で出来上がった」、「意匠の上より見て、構造・材料より来る矛盾はまぬかれない」とモスクを酷評している[107]。その前後には村野藤吾や山口文象らの「モダン」な作品が紹介されているから、このような様式建築を鉄筋コンクリートで作ったことをどうしても許せなかったのであろう。続いて滝沢は、「若しも回教問題が興亜の一環をなすならば将来此所にも一種の興亜型が新しく試みられねばなるまい」などと、新たな国策のモスク建築に自ら関与したいという色気すらみせている。だが周知のように、モダニズムの大東亜モスクが建てられることはついになかった。

言葉を持たない建築技師だった吉本が、戦後に書き残したものはほとんどなく、どのような心境にあったかはうかがい知ることはできない。ただわずかに、羽田空港拡張工事の参考にと世界の空港を見学した際の体験を語る講演要旨が現存している[108]。ニューヨーク、パリ、ブリュッセル、ローマ、ロンドンを訪問した吉本は、野球見物やホテルでのマッサージ、食事の話をするばかりで、現地の建築については何ら語ってくれない。あるいは青年期に学んだはずの本場の様式建築を目にしても、実業家吉本與志雄はもはや何も感じなかったのかもしれない。

105) 公安調査庁編『安保闘争の概要－闘争の経過と分析』公安調査庁、1960、215 頁。

106) 日本の戦後処理において、軍人や政治家の戦争責任は問われる一方で、吉本を含む技術者たちの関与と責任はほとんど不問に付された。建築界も積極的ないしは消極的に戦争協力をおこなったが、その総括は未だおこなわれていないことをここに付言しておきたい。

107) 滝沢真弓「設計意匠」建築學會編『昭和十四年版建築年鑑』1939、49 頁。

108) 『建築研究』6(1)、1960、20 頁 ;『建築研究』6(2)、1960、3 頁。1958 年 5 月から日本航空ビルデング社長の秋山龍が二ヶ月半欧米出張しているので、これに随行したと考えられる。日本空港ビルデング株式会社資料編、1965、9 頁。

それはひとりの建築家としては悲しいことだが、古びて社会に必要とされなくなってしまった技術を抱える技師の、その後の身の振り方としては上々なのだろう。建築という技術を身につけて世に出た若い技師たちのうち、作品とともにその名が後世まで残る人物は残念ながらごくわずかである。吉本與志雄の代表作である東京モスクも老朽化のために取り壊されてしまった。それでも技師の名は、今も徳川美術館の銘文に残されている。

参考文献

Misawa, Nobuo(ed.). 2011: *Tokyo Muslim School Album(1927-1937)*. Tokyo: Asian Cultures Research Institute, Toyo University.

『読売新聞』1930年12月15日夕刊第7面。

『読売新聞』1937年10月17日夕刊第4面。

『建築研究』6(1)、1960。

『建築研究』6(2)、1960。

『建築雑誌』462、1924。

『建築知識』2(5)、1936。

『建築世界』10(12)、1916。

『発明＝The Invention』69(11)、1972。

『三菱社誌』第28巻・大正6年下（復刻版）、東京大学出版会、1981。

『三菱社誌』第32巻・大正12年（復刻版）、東京大学出版会、1981。

『愛知銀行46年史』東海銀行、1944。

国勢協会編　1954：『国政総覧第10版』国際連合通信社。

人事興信所編　1973：『人事興信録第27版』下巻人事興信所。

帝国興信所編　1964：『帝国銀行・会社要録第45版』帝国興信所。

天沼俊一　1927：『埃及紀行』岩波書店。

五十嵐あすか　2020：「代々木上原を中心としたムスリムコミュニティと東京回教礼拝堂に関する研究」東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士論文。

石田潤一郎監修　2015：『竹中工務店建築写真集』第4輯、ゆまに書房。

稲垣栄三　1979：『日本の近代建築－その成立過程』上・下巻、鹿島出版会。

犬塚きよ子　1981：『ユダヤ問題と日本の工作』日本工業新聞社。

井上章一　1987：『アート・キッチュ・ジャパネスク－大東亜のポストモダン』青土社。

板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編　1999：『常盤台住宅物語』板橋区教育委員会。

岩井大慧編　1939：『東洋文庫十五年史』東洋文庫。

宇高雄志　2018：『神戸モスク－建築と街と人』東方出版。

回教圏攷究所編　1940：『回教圏史要』回教圏攷究所。

香山理絵　2013：「徳川義親の美術館設立想起」『金鯱叢書』41。

香山理絵　2015：「「徳川美術館設計」懸賞」『金鯱叢書』43。

河東義之　2017：「櫻井小太郎」丸山雅子監修『日本近代建築家列伝』鹿島出版界、109-116頁。

藏前工業會館編　1943：『藏前工業會館創立十年史』藏前工業會館。

公安調査庁編　1960：『安保闘争の概要－闘争の経過と分析』公安調査庁。

越沢明　1978：『植民地満州の都市計画』アジア経済研究所。

小松久男　2008：『イブラヒム、日本への旅－ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房。

坂本勉　2001：「東京モスク沿革誌」『アジア遊学30－特集：イスラムとの出会い』勉誠出版。

滝沢真弓　1939：「設計意匠」建築學會編『昭和十四年版建築年鑑』。

田澤拓也　1998：『ムスリム・ニッポン』小学館。

東京イスラム教團　1938：『禮拜堂開堂一周年・回教公認問題決定記念』東京イスラム教團。

中野雅夫　1977：『革命は藝術なり－徳川義親の生涯』學藝書林。

西澤泰彦　1996：『海を渡った日本人建築家』彰国社。

日本空港ビルデング株式会社　1965：『東京国際空港ターミナル・ビル十年の歩み』日本空港ビルデング株式会社。

日本航空協会編　1966：『日本民間航空史話』日本航空協会。

阪東宏　2002：『日本のユダヤ人政策1931-1945』未來社。

日向進編著　2018：『永平寺建造物調査報告書』大本山永平寺。

深見奈緒子　2005：『世界のイスラーム建築』講談社。

藤森照信　1992：「丸の内をつくった建築家たち－むかし・いま」『別冊新建築　日本現代建築家シリーズ15　三菱地所』新建築社、195-254頁。

藤森照信　1993：『日本の近代建築』下巻、岩波書店。

府中市教育委員会編　2009：『府中市の歴史的建造物』府中市教育委員会。

フレッチャア（古宇田實・齋藤茂三郎訳）　1919：『建築史』岩波書店。

堀勇良　2022：『日本近代建築人名総覧　増補版』中央公論新社。

松長昭　2008：「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉編『日中戦争とイスラーム』慶應大学出版会。

松長昭　2009：『在日タタール人－歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋出版。

水之江季彦・竹下昌三　1966：『水島工業地帯の生成と発展』風間書房。

店田廣文　2015：『日本のモスク　滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社。

三菱地所株式会社社史編纂室編　1993：『丸の内百年のあゆみ－三菱地所社史』上巻、三菱地所。

村松貞次郎　1977：『日本近代建築の歴史』NHK出版。

吉本與志雄　1934：「北鮮羅津の重要性を論ず」『醤油と味噌』3(4)。

吉本與志雄(?)　1938：「竣功建造物－東京回教禮拜堂」『建築雑誌』52(642)。

山岡光太郎　1912：『世界の神秘境－アラビヤ縦断記』東亜堂書房。

山下王世　2008：「トルコ共和国のモスクデザインにみられる諸課題」『日本建築学会計画系論文集』73 (626)。